

**立教大学学術推進特別重点資金（立教SFR）
プロジェクト研究（自由プロジェクト研究）
2010年度研究【経過・成果】報告書**

研究代表者	所属・職名	氏名		
	立教大学文学部・教授	浦野 聡	印	
研究課題	古代都市トロス聖域発掘予備調査			
研究組織	所属大学名等・職名	氏名		
	東海大学産業工学部教授	渡邊道治		
	千葉商科大学商経学部教授	師尾晶子		
	立教大学文学部教授	深津行徳		
	立教大学兼任講師	志内一興		
研究期間	2010年度	～	2011年度	
研究経費	2010年度	2011年度	総計	
	2065千円	2900千円	4965千円	

研究の概要 (200～300字で記入、図・グラフ等は使用しないこと。)

トロスでは、キリスト教の国教化に伴い、都市主神の中心聖域跡に司教座聖堂が建設されたが、それは、都市祭儀の際に象徴的かつ明示的に機能していたであろう既存の都市の空間構成の有機的システムを根本から破壊し、新しいキリスト教的空間秩序を現出させたと考えられる。都市主神の祭儀は、プロセッションや供犠、祝典を通じ、すべての公共施設をフル活用し、市民たちが行事の進行につれてそれらの間を行き来する中で、互いの共同体的紐帯を確認しあうのに最適の空間構成を示す一方、キリスト教の典礼は、それらの公共施設の使用を前提にすることはないからである。本研究プロジェクトは、教会遺構区画の表土を床上50センチレベルまで除去し、床面レベルに数本のトレンチを入れることで、聖域＝聖堂空間を焦点にした空間構成再編成に関する考古学的、碑文学的、建築史的、美術史的データを、組織的に収集することを目的とする。

キーワード (研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入。)

[古代都市] [古代末期キリスト教] [聖域と聖堂]

研究【経過・成果】の概要 (図・グラフ等は使用しないこと。)

予備発掘調査は、トルコ共和国アクデニス大学のタネル=コルクート教授総指揮の下、二〇一〇年七月九日～八月二〇日に行われた。参加者は、代表者浦野のほか、金指もと子(立教大学学生)、寺内正明(蓮田市役所)、深津行徳(立教大学)、師尾晶子(千葉商科大学)の5名である。作業詳細は次の通り。

- I 七月九～三十一日 クリーンワーク アクデニス大学タネル=コルクート教授に委託
- II 八月六日～九日 トロス遺跡出土碑文の検討(浦野・師尾)
- III 八月一〇～一四日 トロス遺跡教会の実測(寺内・深津)および、教会内遺物のナンバリング(浦野・金指・師尾)
- IV 八月一六・一七日 教会内柱礎石列の実測(金指・寺内・深津・師尾)および教会内遺物の実測(浦野・金指・寺内・深津・師尾)
- V 八月一八・一九日 出土土器の実測(浦野・金指・深津～一九日)および碑文調査((浦野・師尾)

上記 I の過程で、墓 3 基が、前庭(もしくは拝廊)部南部分、地表下 40 センチから、発掘された。それぞれ成人人骨 4 体を持つ A、成人人骨 2 体を持つ B、乳児人骨 2 体を持つ C の三基である。12 世紀から 13 世紀のビザンツ時代後期の陶器片が B 墓郭内から出ていることから、現在のところその前後の時代のもものと推察しているが、遺骨の上部から出てきたものであり、墓の築造年代特定については、聖堂の放棄時期の確定を待たねばならない。

また、この作業の過程で、聖堂の西側の壁から聖堂内部に 3 メートルのところまで表土除去を行った。側廊と身廊を分かつ柱列は、腰高の仕切り(パラペット)で区切られていたことが発掘前から確認されていたが、今年度の発掘により、入り口から最初の柱にいたるまでの仕切りは、セメントで固めた幅広の腰高仕切り壁となっていたことが確認された。この腰高壁は、西側の入り口がある聖堂内壁面に対して、後代に取り付けられていることが明らかになった。すなわち、聖堂内壁面は、彩色の漆喰で塗られていた痕跡があるが、仕切り壁は、その漆喰面に接するような形で取り付けられているからである。また、仕切り壁には、幅 1 メートル弱、左右の側廊から身廊に抜ける戸口が開けられているが、そのうち北側の戸口の敷居石は、2 世紀から 3 世紀にかけてのものと思われる碑文を有する切石が転用されていた。

さらに聖堂外側のクリーンワークから、少なくとも 2 種類の外構の痕跡が見出された。ひとつは聖堂の南側側廊の外側に、翼廊の右翼の幅と一致する形で細長く建造物が取り付けられているものである。この建造物は、構造的に聖堂本体とは独立して取り付けられているので、聖堂それ自体より後代の増築と考えられる。もうひとつは、アプシスの左右、翼廊外側の付属部屋である。この部屋は、切石の組み方から、アプシスと構造的に一体となっていることがわかるので、アプシスと同じ時期の建築であろうと推測される。すなわち、聖堂建築当初から存在した祭具室等の痕跡と考えられる。

上記 II の過程で、15 点の新発見の碑文が確認された。工房の印と考えられる引掻き文字(graftito)一点をのぞいて、今回目にするのできた碑文はすべてヘレニズム期からローマ帝政期までのもので、いずれも聖堂建築の部材として再利用されたものであった。(一)～(五)と(一五)以外、いずれも、二〇一〇年シーズン終了後、保護のためにアンタルヤ博物館に運ばれた。以下、主要なもの 9 点について概略を記す。

(一) 後陣に近い身廊に半分埋もれたまま放置されている建築部材(B 9-10)

横幅最大 0・六七 m、高さ最大 0・三〇 m ほどの直方体の石材。横長の形状から何らかの古代の建築物のアーキトレイヴから転用された可能性がある。「大クロネイア祭のためにマルコス・アウレリオス・ライトスが競技委員を務めた年」という刻文年代を示す文言が冒頭に残されているが、本文の内容は欠損しており不明である。競技委員を務めた人物の名前の特徴から、後二世紀後半から三世紀の碑文と考えられる。

(二) 聖堂南壁の外側に落下し放置されたままの建築部材(G-52)

二〇一〇年七月三日に周囲の瓦礫の除去作業中に聖堂南壁の外側で発見され、そのまま現場に残されている。横幅は上部 0・四六 m、下部 0・五 m、高さ 0・三五 m ほどの直方体に近い形の建築部材である。表面の上部に三行ほど銘文が残されている。三行目に「皇帝を愛する者たち」という語の一部[Φ I] Λ Ο Κ Α Ι Σ Α Ρ Ε Σ が読めることから、帝政期の碑文で、何らかの奉献碑文ないし顕彰碑文の部分であると思われる。

(三) 拝廊(もしくは前庭)の瓦礫から発見された建築部材(D-38)

底面が台形に半円をつけたような形になった柱状の建築部材の側面に碑文が細長く残されている。石材の高さは

研究【経過・成果】の概要 つづき

○・七七mで、厚さは○・四五mほどである。碑面は幅○・一二m、高さ○・四四mほどで、一二行にわたり、一行あたりの文字数は三～四文字である。内容は不明であるが、七行目と八行目に NEΨ という文字が読めること、また他の行においても名前の一部と思われるアルファベットの組み合わせが頻出すること、名前の末尾と思われる OΣ 等の次の文字が若干間隔を空けて刻まれていることから、何らかの名前の一覧である可能性が高いと思われる。これについては、さらなる分析が必要である。

(四) 聖堂北壁の外側上部にはめ込まれたままの部材

遺構の外壁外側に視認できた碑文は、一枚のみであった。北側の外壁に T Λ Ω E Ω Σ すなわち「トロス人の」という文字が刻まれた薄い石板が上下逆転した形で切石の埋め石として使われている。

(五) 身廊と北側廊を分ける柱間 (A 1-1、A 2-1) に置かれた敷居石

身廊・側廊への入口に近い A 1-1 と A 2-1 の柱の間におかれた敷居石は、ローマ帝政期の碑文が転用されたものである。二〇一〇年度は掘り起こさなかったため、写真撮影と視認にとどまり、採寸や拓本取りといった作業はおこなっていない。内容はアポロドロスの息子何某に対する顕彰碑文である。この被顕彰者の経験してきたさまざまな官職が列挙されており、次年度以降の本格的な検分が待たれる。今後官職の分析を通して、刻文年代をもう少し限定することが可能になるかもしれない。

(六) 拝廊 (もしくは前庭) で確認された建築部材

横幅最大○・四六m、高さ最大○・三五m、厚さ○・一九mほどの石で、碑文のある面と反対側の裏面には一面にノミで削った跡が見られる。聖堂遺構の清掃作業に取りかかる前から、拝廊もしくは前庭の地面に転がっていたことが確認されており、図六bは二〇〇九年に撮影されたものである。形状からは、壁面の建築部材に転用されたもののように見受けられるが、確定的なことはいえない。一行目に T I B E [P I O T]、二行目に [K A] I Σ A P O Σ、三行目に [A T T O] K P A T O P O Σ と読めることから、ユリウス・クラウディウス朝期のものと考えられる。ただし、ティベリウス帝と一行目、および五行目に Ω I で示される者との関わりについては、現状では不明である。

(七) 拝廊 (もしくは前庭) 部分の整地の過程で発見された円柱台座の形状をした建築部材

七月三十一日、拝廊 (もしくは前庭) の表土をはぎ、整地する過程で発見された。直径○・三五m、高さ○・〇八mほどの円柱部分の付いた最大横幅○・三八m、高さ○・二六mの柱礎と思われる建築部材で、礎盤の一面に碑文が残っている。兄弟が父親のために祭壇を設置奉獻したことを記した奉納碑文で、一行目に「ディオスの息子のラボスが神官の年」という奉獻年代が記載されている。年代は、ヘレニズム時代のものである可能性が高い。

(八) 聖堂外壁の瓦礫から発見された建築部材

日本隊の到着前、七月七日に聖堂外壁の瓦礫の除去の最中に発見された。外壁の上部から崩落したものと思われる。発見現場に居合わせず、また現在のどこにあるか不明なため、現況では清掃作業をおこなったトルコ隊の撮影した写真のみの確認にとどまる。「何某の息子何某」という名前のリストと右端に金額と思われるマークが残されていることから、建造物の修繕その他に関わる寄付金提供者の一覧である可能性がある。

(九) 聖堂遺構の建築部材

発見日、発見場所の詳細は不明。現地の仮倉庫に保管され、二〇一〇年度の発掘調査終了後、博物館に移された。横幅○・二五～○・二七m、高さ○・二三～○・二六mで、すべての側面が欠けている。九行にわたって碑文が残されている。「許可なくしていかなる者も埋葬することはできない」といった文言が読み取れることから、墓碑の一部であると考えられる。

上記Ⅲ・Ⅳの過程で、聖堂遺構全体の平面図1点、側廊と身廊の仕切り壁の立面図4点を作成した。また、主要部材の散乱状況を記録するための図面を、聖堂内部と前庭部、聖堂外構部について各1点を作成し、聖堂内部については、聖堂全体を24区画に分割して縄張りをし、より詳細な配置図を作成した。

上記Ⅴの過程で、発掘済みの部分から出土した土器25点について実測図を作成した。また特徴ある金属器、土器については、写真を撮影した。

研究発表 (研究によって得られた研究経過・成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。)

- ①雑誌論文 (著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)
- ②図書 (著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数)
- ③シンポジウム・公開講演会等の開催 (会名、開催日、開催場所)
- ④その他 (学会発表、研究報告書の印刷等)

① 浦野聡「トロス司教座聖堂の発掘について」、『史苑』2011年3月(震災により浦安の印刷所が被害を受けたため、実際の刊行は5月。よってページ数不明)

師尾晶子「二〇一〇年度発掘調査によるトロス教会聖堂出土碑文の概要」、『史苑』2011年3月(同上)

深津行徳「都市と祭祀空間 -二〇一〇年度トロス司教座聖堂予備発掘調査報告-」、『史苑』2011年3月(同上)